



障がい者と接して

私は、福祉施設の職員時代も含め30年ほど、障がい者とともに過ごしてきました。

ここ（ひまわりの家）へ来て驚いたのは、福祉施設で何年も暮らしている人よりも、この施設の皆さんの方が生き

生きとしていることです。やはり、健常者と同じく、家族がいることが何より刺激になるからではないでしょうか。

私たち支援者（職員）が日々心掛けていることは、作業や生活支援を通して、毎日同じような時間の流れの中で、少しずつ変化を持たせ、

障がい者も、日々の生活の中で、刺激が大切です。
その刺激には、家族や地域社会の協力が欠かせません。

「ひまわりの家」施設長 可児 要さん

障がい者も、地域社会の仲間です。一人の人間として向き合っていただきたいと思いますね。

時には唐突な活動を設定したり、彼らの感情や行動に刺激を与えたりすることにより、一人の人間として彼らの貴重な人生を過ごさせてあげたいということです。

しかし、そうした理想の実は、ひまわりの家だけではできません。なぜなら、彼らは、この地域社会に暮らしている、生活の大半を過ごしているからです。

「一人の人間として彼らの貴重な人生を過ごさせてあげる」には、彼らのことを皆さんに理解していただき、地域社会で暮らしていける手助けをお願いしたいですね。



トーン・チャイム／演奏曲目が増えました



野点（のだて）に挑戦／「ひまわりの家流」ですが、野点に挑戦しました



ゴム製品のばり取り／一つ一つ、丁寧にばりを取り除きます



サツマイモ堀り



ひまわりの家
親の会会長
馬淵ふじ江さん

障がいのある子どもが、少しでも社会参加できるよう育（はぐく）むことが大切では・・・

知的に障がいがある息子が、お世話になっっています。

すべての障がい者は、本来地域の中で生活することが一番だと思います。そのため、私たち関係者は、「ただ、障がい者を理解してください」と力説するだけではいけないと思います。

私たち、障がいのある子を持つ親も、少しでも彼らが、社会参加できるよう育むことが大切ではないかと思っています。ひまわりの家の通所者も、繰り返し訓練を積み重ねることにより、日常の基本的なことが身に付

きます。息子を見ていて思ういます。

子どもが成長するの逆は親は年々老いていきます。私たち親が亡くなった後でも、彼らが普通の暮らしができるような社会になればと思います。

また、忘れてはいけないのが、この授産所の運営にご協力いただいている多くのボランティアの皆さんの力です。

最後に、家族に障がいを持つ人がいて、不安な日々を送ってみえる人は、私たちとお話ししませんか。話されることにより気持ちが和らぐと思います。

家族の理解

私には気掛かりなことがあります。それは、市内には、多くの障がい者が生活してみえるにもかかわらず、こうした施設利用者が少ないことです。

その一因と考えられることに、家族に障がい者がいる場合、彼らの身を思い案じるばかりに、身近な人が人格を傷つけ、人権や権利を阻害しているのではないかということです。

私は、家族の協調とバランスの取れた愛情の育（はぐく）みが基礎となり、彼らに

対する深い理解が生まれると思います。また、そうした家族の中で暮らすことで、成長できると思います。

また、日々の暮らしを体験することにより、少しずつではありますが、周囲の人との人間関係もできてくると思います。

だからこそ、こうした施設での社会参加へ向けた取り組みに、彼らに参加させていたいただきたいですね。

そのことが、親亡き後の生活を可能にする第一歩となり、生きていく力となって自立した生活が実現されると思います。



オリジナル

はがきや名刺を作いませんか

ひまわりの家では、牛乳パックにクズ・ガンビなどの植物繊維を加えたはがきや名刺を注文により製作しています。（押し花入りもあります）

※問い合わせは、ひまわりの家まで